

平成 24 年度 研究レポート

児童の心を育む道徳授業の研究

「13 歳からの道徳教科書」を教材として

津田学園小学校

教諭 長谷川智哉

はじめに

本年度から津田学園小学校は「13歳からの道徳教科書」を採用することになった。「13歳からの」子どもがターゲットであるから、中学生用に作成されたものである。これを小学校で採用するのは先進的である。他県の教員が視察に来るほどである。私が教材を選んだ訳ではないが、誇らしい。

さて、夏休みのことである。レポートの題目変更を校長先生に願い出た。国語についての研究から道徳のそれに変更したかったのである。私の勝手な申し出であったが、快く許可していただいた。それと同時に、あるご提案まで頂戴した。外部に論文を出してみてもどうかという内容である。恐縮するばかりであった。また、教師としての自信を失いかけていた時でもあり、どこか救われる思いであった。

しかし、このレポートは外部に出すに値しないものである。自分の頭の中で考えていたことを整理したものであり、「自己研修ノート」のような感じになってしまった。外部に出すにはお粗末である。ただ、あわよくば津田学園小学校の1つの財産となればと思う。

このレポートは「13歳からの道徳教科書」に焦点を当てたものである。特に以下の3点に的を絞った。

1. 「13歳からの道徳教科書」の異質性
2. 「13歳からの道徳教科書」を用いた授業の創り方
3. 道徳授業をする上で大切にしたいこと

まず、この教科書と他の道徳副読本との差異を明らかにし、有効性について述べる。次に、中学生用の教材を小学校で使用していくにあたって、どこに気を付けて授業を創り、実践していかねばならないのかについて述べる。これらを掘り下げていけば、この教科書の有効な活用方法が見えてくるはずである。

津田学園小学校の道徳教育を充実したものにしていくことは現在の重要課題である。津田学園小学校は次年度10年目を迎える。第2ステージへ昇る。教育内容も見つめ直す時期に来ている。教育活動のそれぞれの意味を徹底的に再確認、再検討していかねばならない。私はそのために動く。覚悟を持って動く。話が少し逸れたが、道徳教育も同様、変革の時である。校長先生が道徳の時間数について、次のような指摘をされた。

「計上されている道徳の時間数は実際の道徳授業の時間数か」

答えは否である。よって、教務担当者が動き、時間割を改善する運びとなった。実際、道徳の時間数については、このレポートで「計上された時間数」と「実際の授業数」を比較してみようと考えていた。しかし、その必要性はなくなった。

ここ数年、本校で1番多くの道徳の授業を実践してきたという自負が私にはある。学級会などを道徳に変更して道徳授業をしてきた。道徳の授業をする時間がなかったからだ。校長先生の早期発見・対処によって、危機的状況は回避された。本来は現場の人間が声を上げていかねばならない。そういう発信力のある教師になりたい。

繰り返しになるが、津田学園小学校は第2ステージに上がっていかねばならない。急務である。そういう状況の中でこのレポートを「叩き台」という名の財産にするのだという覚悟を持って、今回のレポートに取り組みさせていただいた。

I. 「13歳からの道徳教科書」の異質性

私は小学校時代の道徳授業についての記憶がほとんどない。ある1つの授業しか思い出せない。奇跡的に覚えているのは、部落差別についての授業であり、私が6年生の時であった。記憶が確かなら、6年生のどのクラスでもやっていた。4・5時間程かけて授業は展開された。実話に基づいた物語を毎時間、読み進めていくというものであったと思う。物語を読み進めていくうちに、涙が出そうになったのを覚えている。

私がこの授業をわずかながらに覚えているのは、教材が私の心を震わせたからである。心を動かされた出来事は脳内に残りやすい。つまり、私がこの授業を覚えていたのは奇跡ではなく、当然なのである。

このように考えると、教材はやはり心に響くものの方が断然よい。「13歳からの道徳教科書」には読むだけで心に響く話が多数存在する。副読本はそれが少ない。この違いはどこからくるのか。

1. 実話

「13歳からの道徳教科書」はほとんどが実話である。総作品数37のうち文学作品が2つ。フィクションはこれだけである。これは異質である。道徳副読本はフィクションの割合が多い。既存の道徳副読本は半分以上がフィクションなので、この違いは大きい。

昨年、受け持ったのは3年生。私は道徳の授業研究に密かに力を入れていた。「1粒の豆」という資料を使って授業をした。TOSS(前 教育技術法則化運動)道徳代表の河田孝文氏の授業の追試である。授業の数日後、資料を読んだある保護者から連絡帳にて一筆いただいた。正確には覚えていないが、「忙しさの中で大切なことを忘れていたと気づかされました。子どもをもっと褒めてあげたい、抱きしめてあげたいと思います」といった内容であった。「1粒の豆」には、貧しく、苦しい生活の中、懸命に生きる母子が描かれている。素晴らしい資料は児童だけにとどまらず、保護者の心までも揺さぶってしまうのだ。

「1粒の豆」は実話である。実在の人物の生き様は読者の心を打つ。道徳の資料にとって実話は必要な条件である。もちろん、物語・寓話なども大切である。日本人が忘れてはならない心がそこにはある。読む機会を作ってあげなければならない。しかし、道徳の資料ではなく、読み物として読ませたい。実話に勝る資料は中々、存在しないのだ。副読本でさえも、半分は実話に基づいたものである。実話の持つ力は大きいのだ。ほとんど全てが実話で構成された「13歳からの道徳教科書」は異質な存在であり、秀逸な教材である。

2. 日本人の生き方・気概

東日本大震災後の日本人の行動は世界から称賛された。辛く、悲しい出来事の中から生まれた1つの光であった。日本人の規範意識は高い。それが証明された。もちろん、規範意識が低くなりつつある現状もある。しかし、日本人は今まで「日本は反省と謝罪をしなければならない」といった自虐史観の中、生かされてきた。今こそ、日本人としての誇りを取り戻さなくてはならない。世界のメディアの声に、誇らしく思った日本人が多くいたはずである。

日本の子育ても見直されるようになった。現在の教育の最先端分野の1つは「親学」である。家庭教育の質が低下している現状を受け、子どもたちに親になるための勉強をさせるというものである。日本の伝統的な子育てを見直そうというのだ。今後、この動きは活発化する。第96代内閣総理大臣となった安倍晋三氏は親学推進議員連盟会長、山口県親学推進委員会名誉会長でもある。活発にならない方が

おかしい。

今こそ、日本人としての生き方・気概というものをもっと大切にしていかなければならない。「13歳からの道徳教科書」はこれを伝えていくのに、うってつけである。実際に「日本の伝統と文化を重視した編集」をしたと武蔵野大学教授である貝塚茂樹氏が、この教科書の中で述べている（「13歳からの道徳教科書」p. 272）。

副読本にも日本人としての生き方・気概を伝えるという意識はあるはずである。しかし、この教科書に比べれば、その意識は薄い。この点から見ても、先進的で異質な教材である。後述するが、生き方・気概を伝える道徳はすぐに効果はでない。成果が出るのはいつか分からない。でも、伝えていくべきことである。「13歳からの道徳教科書」であれば、それが可能である。

II. 「13歳からの道徳教科書」の授業を創る

「13歳からの道徳教科書」に収められた作品はそれぞれが大きな力を持っており、内容も深いものである。それ故に、教師は悩む。実際に授業をした教師なら分かるのだが、どのように授業したものかと途方に暮れる。「読むだけでいいではないか」という極論が頭をよぎるからである。それほどに充実した内容なのである。

12月現在で5回、この教科書を使って授業をした。まだ数は少ない。しかし、その中で自分なりの教材研究の方法が身に付いてきた。ここに私の授業作成法を述べていく。

1. 情報を取捨選択する

基本的には1時間完結型の授業としたい。2時間続きの道徳授業はハードルが高い。次の授業の方向性を児童に悟られてしまうからだ。授業展開が読めないように配慮する必要がある。ハードルの高さはここにある。2時間続きでやる場合、1時間で授業をして、もう1時間で実習形式の授業をするのも1つの手であるが、実際にそればかりではやっていけない。基本的に1時間完結が好ましい。2時間完結のものにするのは時々で良い。

さて、1時間で授業するとなれば、授業者は悩む。本文から得られる情報量が極めて多いのだ。読者にとってはありがたいのだが、授業をする側としては悩みの種でもある。逆に歴史的背景などを児童が知らないということで、新たに情報を伝えなければいけない時だってある。1時間で完結するためには情報の取捨選択が必要である。

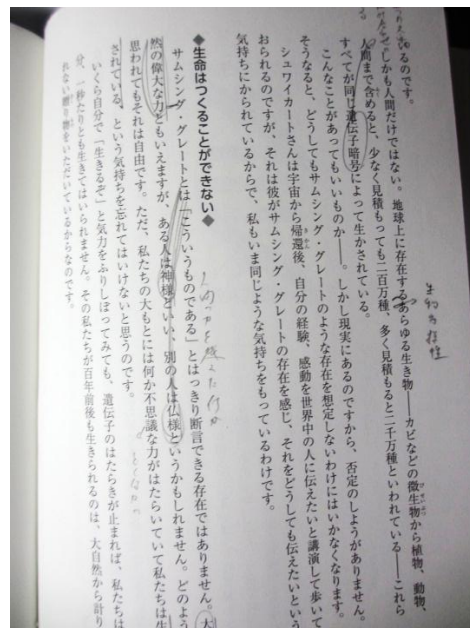
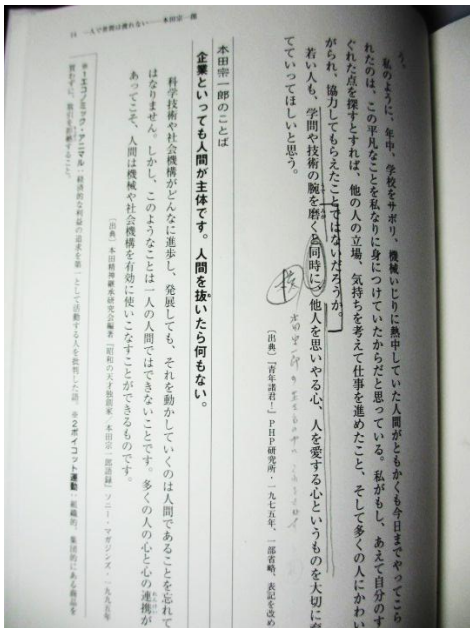
1つの作品に10の情報があると仮定する。児童が1回読んで10の情報を正確に読み取ることができるだろうか。できる子もいるだろうが、できない子もいる。8割の子ができないだろう。では、「できない子」は最低限、何を読み取ることができれば、授業のめあてを達成できるだろうか。これを見極める。教師の腕の見せ所である。情報の取捨選択である。実際の流れで見ていきたい。浪速中学校の先生が視察に来られた際に使用した作品「生命のふしぎ（サムシング・グレート）」を例に挙げる。

私はまず作品を読む。何度も読む。最初の10回は話を頭に入れるために、ただひたすらに読んでいく。内容が頭に入ってくると、次は設定された「めあて」を読む。そして、また本文を読む。この時の

作業を私は「核を探す」と位置付けている。核探しのために数十回は本文全文を読んでいると思う。部分的にはそれを超える。その中で私が頭で行っている作業は以下の2つである。

1. 本文の内容を鑑み、設定されたためあての中で最重要なものを探る。
2. 削ぎ落としたためあてと強くリンクする部分を文章中から探す。

これを並行して行っている。本文に線を引いたり、語句を丸で囲んだりしながら、この作業を行う。すると、この教材文で教えたい、伝えたい核が見えてくる。そこから主発問が生まれ、それに至る種々の発問が生まれ、導入が生まれる。端的に言えば、めあてと本文からそれぞれの核を探す作業を行っているのである。



教材研究時のメモ 左：「一人で世間は渡れない」 右：「生命のふしぎ」

この作品のめあては以下のようにになっている。

自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めましょう。

これを一気に達成するような授業は私には無理である。範囲が広すぎるからだ。だから、削ぎ落とすことから始める。私は以下のようにした。

~~自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めましょう。~~

削ぎ落とした部分を無視するわけではない。意識はするが、重きは置かないということである。どうい

う思考の下、削除したのか。本文中に以下のような文章がある。

まさに奇跡というしかなく、人間業をはるかに超えている。そうなると、どうしても人間を超えた存在を想定しないわけにはいかない。そういう存在を私は「偉大なる何者か」という意味で十年くらい前からサムシング・グレートと呼んできました。

「13歳からの道徳教科書」p. 130

「サムシング・グレート」はこの作品を貫くキーワードでもある。そして、筆者は「人間を超えた存在」を「サムシング・グレート」と呼ぶ。よって、めあての中で該当する部分のみを残し、他を削除したのである。ちなみに私が考えた「本時の目標」は次の通りである。

遺伝子構造の精巧さを知ると同時に生命の神秘さを感じ、人智を超えた存在に畏敬の念を持つことができる。

抽出した核を軸にして、「本時の目標」を設定した。文言が若干違うのは本文と授業に即して変更しているためである。掲げられているめあてはあくまで、学習指導要領の言葉を使用して作られたものである。本文に即して変更する必要がある。

さて、本文の核はどこか。以下である。

サムシング・グレートとは「こういうものである」とはっきり断言できる存在ではありません。大自然の偉大な力ともいえますが、ある人は神様といい、別の人は仏様というかもしれません。どのように思われてもそれは自由です。ただ、私たちの大もとには何か不思議な力がはたらいていて私たちは生かされている、という気持ちを忘れてはいけないと思うのです。

「13歳からの道徳教科書」p. 132

「サムシング・グレート」の「不思議な力」によって「私たちは生かされている」と筆者は述べる。「サムシング・グレート」が偉大である所以である。そこから主発問が生まれる。

サムシング・グレートはなぜ偉大なのですか。

この発問により、人智を超えた存在に児童が目を向け、生命のふしぎさについて思考を深めるのではないかと考えた。実際、本文を読み返したり、授業の前半部分を思い出したりしながら児童はプリントに記述していた。これが主発問の考案に至るまでの大まかな流れである。

2. 児童の思考を促す「物」を用意する

私は「13歳からの道徳教科書」を授業で使う時、パワーポイントをよく使用する。画像の提示を効率良く、効果的に行うことができるからだ。

本文の中には読むだけになってしまう部分が多い。1時間で授業を完結するためである。また、読むだけでは内容が掴みにくかったり、イメージできなかつたりする時がある。これらを解決してくれるの

が画像や動画である。児童に効率よく情報を与えることができる。

例えば、マザーテレサを扱った時、文章は 9 ページに及んだ。全部読んでいては、授業にならない。読む作業が多くなり、単調になってしまう。間延びしてしまい、授業のリズムが損なわれる。そこで、私は動画を用いた。マザーテレサの生き様をドキュメンタリー形式で紹介したものである。教科書の一部の内容と一致していた。You Tube から引っ張ってきたものだ。これにより、読むだけの授業にならずに済み、児童が思考する時間をしっかりと与えることができた。

画像や動画を探すのはもちろんなのだが、他の著作や関連書籍などに当たることも必要である。新たな発見があったり、良い資料が見つかったりと有益である。授業に厚みも出てくる。もちろん、授業に使えない情報がほとんどである。しかし、なぜ、それは使うに値しないのかと自問自答した時に、新たに見えてくるものがあるのも事実である。どちらにしても、有益なのである。

私の尊敬する教師である向山洋一氏は著書の中で授業の原則を 10 個挙げている。その中の 1 つが以下である。

第五条 所持物の原則

子どもを活動させるためには、場所と時間と物を与えよ。

明治図書「授業の腕をあげる法則」 p. 35

画像や動画が「物」に当たる。私の行為は授業の原則に外れていない。情報を取捨選択する場合、それを補う手立てを考えることが重要である。また、思考を促す「物」を準備することも大切である。

3. 授業の型

授業を創る過程について述べてきた。創ったら、授業にかける。しかし、これだけで教師の仕事は終わらない。評価せねばならない。教師の重要な仕事である。児童に対する評価はそのまま教師自身の評価である。次の授業への糧となる。

道徳は教科ではない。成績表、指導要録などに評価を記載する箇所はない。しかし、授業をするからには評価基準が必要である。その点について河田孝文氏は次のように述べる。

評価基準を明確にできないということは、教える内容が明確でないのである。

道徳授業を創っていくうえで最も大切なのは「教えることを明確にする」ことである。

教えることを明確にすれば、道徳授業の「教え方」が決まってくる。

明治図書「映像&活字で“プロの授業”をひも解く②」 p. 12

評価基準を明確にしておくことは道徳授業においても重要なのである。明確でなければ、教えることがぶれ、授業は劣悪なものになる。

そこで、河田氏は道徳の授業を形態ごとに分類することから始める。「道徳授業には大きく次の五つの型がある」（同著 p. 12）と氏は主張する。

- (1) スタンス型授業
- (2) スキル型授業

- (3) 反省型授業
- (4) 批評型授業
- (5) 体験型授業

この5つである。分類した上で、氏はそれぞれの授業の型と評価基準の設け方について同著で述べている。ちなみに「13歳からの道徳教科書」を使った授業は「スタンス型授業」になるため、そこだけ取り上げる。

(1) スタンス型授業

人間としての生き方（姿勢）を教える授業。先人やヒーローの生き方・考え方を伝えることが授業の骨格である。スキルを教えるのではなくスタンス（姿勢）を教えるので、子どもの行動がすぐに変わるわけではない。

古今東西の先人の生き方のエキスを子どもの中に蓄積していくのである。

評価は授業後の作文です。評価基準は、「授業で伝えたかった生き方を作文に綴っている」である。生き方からいくつかのキーワードを抽出し作文を評価していく。

(同著 p. 12)

第I章で述べたが、「13歳からの道徳教科書」には実話が多い。「古今東西の先人」の実話である。まさに「スタンス型授業」である。これで「13歳からの道徳教科書」を使った授業の型が見えてくる。

授業の評価は作文で行う。つまり、作文を書かせなければならない。これが授業のまとめの部分になる。そして、教師は授業準備の段階で、児童がどんな作文を書けば授業成功と言えるのか、考えておく。授業作りの最中、これを何度も確認すれば、目標のぶれた劣悪な授業になることはない。

これで授業の枠、内容も決まり、児童とともに授業も評価できるようになった。あとは授業をするだけである。

Ⅲ. 道徳授業をする上で大切にしたいこと

授業には技術が必要である。私のような教師が一流の教師と同じ発問、指示で授業をしても、同じ効果は得られない。微細な技術の質・量に圧倒的な差があるからである。教師たるもの一流を目指したい。

技術の前には心構えがある。教師としての覚悟とも言える。どの授業にも必要である。道徳の授業をする上で必要な心構えについて以下に述べる。

1. 指導案を見ずに授業する

簡単そうで意外と難しい。研究授業などでは指導案を見ながら授業をしてしまう。緊張するから安心感が欲しいのだ。

しかし、良いことは1つもない。指導案を見れば、その数秒間に隙が生まれる。授業からリズムが消え去る。淀んだ空気が教室を包み込む。指導案に囚われ、無理にでもその通りに進めようとする。置き去りにされる児童が出てくる。害だらけである。

それを解消するには指導案を頭に叩き込むしかない。紙を見ずに、指示・発問を正確に言うことができるようになるまで練習する。中途半端に覚えていけば、授業が崩壊する。体に染み込ませるという表現が正しい。これを経て、授業をしてみると、もう指導案を見ながらの授業に戻れない。充実感がある。しっかりと授業をしたという感じだ。終わった後で振り返ると、あの子はこんな発言をした、あの子がよく考えていたなど、かなり正確に思い出せる。子どもを見る余裕が生まれるからである。道徳授業では子どもの心を動かしていくために、子どもを見る、いや、観ることが重要になってくる。やはり、指導案を見ずに授業するという心構えは持つべきである。

2. 発言しやすい環境を作る

どんな意見でも受け入れてもらえると言えらる児童に思わせることが大切である。大前提である。それには意見を聞く側の児童への指導に加え、教師の対応術がものを言う。「この先生なら、少し間違った意見を言っても大丈夫だ」という安心感を与えることができれば言うことはない。ここを目指したい。「なるほど」「その考え方は新しいね」と認めてあげる、教師の切り返しによって上品な笑いを起こしてあげるなど対応の仕方は数多くある。

日々の授業で安心感を児童の頭と心に植え込む。それが信頼関係になる。授業で言えば、特に導入部分が大事である。授業の方向性が決まる。今日の授業は言いたいことを言ってもよいのか、子ども達は教師の出方をうかがっている。導入部分は大事である。

道徳の授業でありがちな光景がある。教師の言いたいことを子ども達が先読みして、きれいごとを並べる授業である。先読みできるのは、学力上位の子だ。そして、教師はそんなことに全く気付かずに「いい意見だ」「すばらしい『気づき』だ」と両手を広げて受け止める。私はこの手の授業が大嫌いだ。

授業は全員参加だ。意見も色々だ。思いもよらない意見が出る。それを受け止める度量が教師には必要である。度量がないと、児童はそれを見抜く。そして、見抜くことができた子が先読み発言をして「よい子」の称号を勝ち取る。そして、その意見をもとにして授業が進行される。当然、深みのある授業にならない。道徳の授業では特にどんな意見でも受け入れられる状況を作っておく必要がある。

悪ふざけの発言は許されるのか。許してはならない。子どもからのアドバルーン、挑戦状である。教師がつぶせばよい。ふざけた発言は許さないという枠組みを作っておいて、その中で言いたいことを言わせていく。この辺りの匙加減は教師に委ねられる。

きれいごとばかり並べる授業では子どもの心は育たない。本音を出して授業を受ければ、心にストンと落ちる何かが出てくるのである。「13歳からの道徳教科書」を使った授業では特に気を付けたい。

まとめ

本校は本年度から「13歳からの道徳教科書」を採用した。この時期に高学年の担任になったのも何かの縁かもしれない。未開拓の教科書で授業を創ることは私にとって大きな修行であった。過去の実践例はない。参考にできるのは、育鵬社ホームページ上の中学生向けに作られた指導案のみである。実際、その指導案通りに授業したことはない。むしろ、全く違うものになった。良いのか悪いのか分からないが、教科書にある作品とそれだけ格闘したということだと思う。

冒頭でも書いたが、今回のレポートを「13歳からの道徳教科書」の授業研究の叩き台にするのだという覚悟で、作成に取り組ませていただいた。その気持ちは今も変わらない。津田学園小学校を次のステージに上げる。そのために尽力したい。

文献目録

宇佐美寛. (2008). 「道徳」授業に何が出来るか. 明治図書.

向山洋一. (1985). 授業の腕をあげる法則. 明治図書.

道徳教育をすすめる有識者の会. (2012). 13歳からの道徳教科書. 育鵬社.

日本教育技術学会 研究開発チーム. (2012). 映像&活字で“プロの授業”をひも解く②. 明治図書.